

掌友会古典セミナー 『黄帝内経』  
 第3回 2022年2月27日  
 日本内経医学会元会長 宮川 浩也

『内経』の3つの流派（五蔵派・経脈派・九鍼派）を明らかにする

【京料理】

京料理	<small>ゆうそく</small> 有職料理（宮廷料理）
	懐石料理（茶事に供される料理）
	精進料理（仏道修行のための料理）
	おばんざい（家庭料理）

\* 個人的な性格として、一料理にこだわって究める料理人になるのは難しい。どのようなニーズにもこたえられるような、広く浅い、料理人になりたい。

【三大流派】

五蔵派：五蔵を調える治療
経脈派：経脈を疏通させる治療
九鍼派：九鍼を使って病邪を取り除く治療

【そのほか】

水穴を使った治療：水分代謝を促進する治療
熱穴を使った治療：熱を取り除く治療
処方治療：病症に対し、数穴による治療法が組み立てられている
特効穴治療：病症→1穴

\* 個々の治療を理解し、一治療を深めるか、多治療をマスターするかを考えて、自分に合う道を見つけたい（正解はないのですが・・・）。

\* 個々の治療を理解し、今の治療が、今の病気に最適なのか、考えてほしい。（正解はないのですが・・・）

## 【三大流派の特徴】

五蔵派	<p>【概要】</p> <p>五蔵は全身を主宰する。  五蔵が乱れると病気が生まれる。  五蔵を調えれば病気は治る。  診察して「五蔵の状態（象）」を推察することを「蔵象」という。</p> <p>【思想的背景】</p> <p>陰陽家（陰陽五行説）。</p>
経脈派	<p>【概要】</p> <p>（はじめ）経脈は、円滑に流れていれば、健康。  経脈が阻滞すると病気が生まれる。  阻滞を解消すれば病気は治る。</p> <p>（のち）経脈の陰陽バランスが失調すれば病気が生まれる。  経脈の陰陽バランスを回復すれば病気は治る。</p> <p>【思想的背景】</p> <p>（はじめ）神仙思想家・（のち）陰陽家。</p>
九鍼派	<p>【概要】</p> <p>病邪があるから病気が生まれる。  病邪を取り除けば病気は治る。</p> <p>【思想的背景】</p> <p>兵家思想。</p>

## 【日原利国編『中国思想辞典』研文出版】

陰陽家	<p>陰陽家の学・術は、古来の天文、暦法の学・術を根源としており、…宇宙、自然にかんする科学的な技術や理論がいちじるしく進歩したのを受け、呪術的な陰陽・五行の体系を巧みに組み合わせた、一種の自然科学が構築された。</p> <p>(中国医学の一部は、陰陽五行説によって整理された。)</p>
神仙家	<p>不老長寿（仙人）をめざす思想。その修行を仙術という。仙術には、辟穀（穀物絶ち）、服食（サプリメント）、房中（性交術）、導引などがある。</p> <p>(導引に、運動、ストレッチ、あんまが含まれる。導引から、初期経脈説が生まれた。)</p>
兵家	<p>兵法に深い洞察をもった戦略家。代表的人物として、孫武、呉起、孫臏がいる。代表的な古典の『孫子』は、</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>① 原因結果の必然性を追求した。</li> <li>② 軍事力の背後に経済力と国家秩序の確立をみた。</li> <li>③ 流動的世界観をもち、あらゆるものは相対的力しかもたない。</li> </ol> <p>を主張した。</p>

## 【三大流派の診断・治療】

五蔵派	<p>【診断・治療】</p> <p>四診を駆使して情報をつめ、五蔵の状態を推測し、 五輸穴・背輸穴・募穴を使って治療して、五蔵を安定化する。 (基本的には) 患部はいじらない。</p> <p>【道具】</p> <p>毫鍼・灸</p> <p>【必要な能力】</p> <p>コツコツカ・工夫力</p> <p>診察力 (情報収集能力)・評価力 (情報整理能力)・証決定力</p>
経脈派	<p>【診断・治療】</p> <p>触診で経脈上の反応を見つける (患部にかぎらない)。圧痛、硬結、熱感、 冷感、陥下、しっとり、乾燥、ざらつきなどを処理することが治療。 また、脈診で陰経・陽経のバランス失調を見つけ、処理する (平均化する)。</p> <p>【道具】</p> <p>毫鍼・灸・マッサージ</p> <p>【必要な能力】</p> <p>健康な身体 (こころ・からだ)</p> <p>触診力・脈診力</p>
九鍼派	<p>【診断・治療】</p> <p>病邪 (敵) の状況を冷静に把握して、 九鍼 (武器) を使いこなして、平定する。 治療するところはおもに患部・局所</p> <p>【道具】</p> <p>九鍼</p> <p>【必要な能力】</p> <p>病邪をみぬく力 (洞察力)</p> <p>神 (研ぎ澄まされた精神・集中した意識)。 神を裏付けする無心 (澄んだこころ)。 九鍼を使いこなす技術。</p>

## 【三大流派の特徴】

## 【虚実】

五蔵派	類推から得られた 五蔵の虚証・実証
経脈派	触診で得られた情報を分ければ、 虚類（冷え・喜按・陷下）・実類（熱・拒按）
九鍼派	刺節真邪篇の五邪を分ければ、 虚類（小邪・寒邪）・実類（癰邪・大邪・熱邪） 九鍼十二原篇の四邪を分ければ、 虚類（虚）・実類（満・宛陳・邪勝）

## 【治療方法】

五蔵派	毫鍼・施灸（・中薬）	要穴メイン
経脈派	毫鍼・施灸・温燂法・マッサージ	要穴＋患部
九鍼派	九鍼	患部メイン

## 【重視すること】

五蔵派	選穴・配穴（主治症・穴性を知っている）
経脈派	探穴（ツボ反応を探る）
九鍼派	選鍼（九鍼を管理するので「官鍼」という）

## 【治療方法】

五蔵派	季節通りの生活の実践
経脈派	片寄った食事や運動不足の改善
九鍼派	（敢えて必要なし）

## 【季節】

五蔵派	季節・月日・時間などを気にする
経脈派	冬季の寒冷を気にする
九鍼派	季節性の感染症を気にする

## 【脈診】

五蔵派	五蔵脈診
経脈派	人迎脈口診
九鍼派	寸口診（脈拍数・脈の強弱のみ）

## 【養生指導】

五蔵派	季節通りの生活の実践
経脈派	片寄った食事や運動不足の改善
九鍼派	（敢えて必要なし）

## (1) 五蔵の治療

陰陽家	陰陽家の学・術は、古来の天文、暦法の学・術を根源としており、…宇宙、自然にかんする科学的な技術や理論がいちじるしく進歩したのを受け、呪術的な陰陽・五行の体系を巧みに組み合わせた、一種の自然科学が構築された。
-----	---

- \* コツコツと観察する（事実を積み上げる）。
- \* 事実から類推して、さらに観察していく。→「工夫する」
- \* さいごに陰陽五行説を使って整備した。
- \* なので陰陽五行説から自然現象の観察をするのは危うい行為である。

【概要】全身を主宰する五蔵が乱れると病気が生まれる。五蔵を調べれば病気は治る。

【思想的背景】陰陽家（陰陽五行説に基づく）

【代表的論篇】『素問』陰陽応象大論・『靈枢』本輸篇など。『難経』で集大成。

【現在では】中医学・経絡治療

【適応】おもに慢性病

【治療道具】毫鍼・お灸。

【治療過失】

診察から証決定で治療効果が決まるから、診察から証決定がまとはずれだと効果がでない。慢性病に適しているなので、時間経過とともに治療効果がでてくる。

【必要な能力】

コツコツ積み上げられる（知識と技術）。類推能力（工夫力）

知識：四診の知識（情報の集め方の知識）

診察：四診の能力（望聞問切）（特に脈診）

評価：集めた情報を評価する能力

【『難経』の五蔵脈診】

	5 難	1 3 難
肺	3 菽	浮、濇而短
心	6 菽	浮、大而散

脾	9 菽	中、緩而大
肝	12 菽	弦而急
腎	至骨	沈、濡而滑（按之濡、拳指来実）

## 【診察の評価】『難経』十六難

<p>（脈）假令得肝脈、</p> <p>（望）其外證、善潔、面青善怒、</p> <p>（腹）其内證、齊左有動氣、按之牢若痛、</p> <p>（問）其病四肢滿、閉癰溲便難、轉筋、</p> <p>（判断）有是者肝也、無是者非也、</p>	<p>（脈）肝脈（弦而急）を得た。</p> <p>（望）よく痙攣し、顔が青く、よく怒る</p> <p>（腹）臍の左に動気あり・押して固く痛む</p> <p>（問）四肢が煩満する、尿閉、大小の便難</p> <p>（判断）肝蔵の病気とするかどうか</p>
--	---

## 【陰陽家が整理した医学は、気象医学的な要素がある】

「気象観測」（天文学・気象学）→「気象は身体に影響がある」（気象医学）

気象	陰陽五行
日照・月の満ち欠け	陰陽
寒気：急激な温度低下・外気温が低いときに悪化（痺証）	五行
湿気：梅雨時、低気圧の接近などで悪化（痺証・マラリア）	
風気：風がつよく吹くときに悪化（花粉症・痺証）	
燥気：乾燥が強い時に悪化（ウイルス増殖）	
暑気：気温が高い時期に発症（熱中症・マラリア）	

「気象は、身体に影響がある」⇒「陰陽と五行は、身体に影響がある」

## 『靈枢』四時氣篇（「五輸穴などに季節性が宿っている」という見方）

四時之氣、各有所在、灸刺之道、得氣穴為定、	季節の気は、全身に存在している。鍼灸治療は「季節の気が発現する経穴を対象にする」のを掟とする。
春取經血脉分肉之間、甚者深刺之、間者淺刺之、	春は、春の気が所在する経穴（經金穴・經火穴）、血脉や分肉の間を刺す。重症であれば深く刺し、軽症であれば浅く刺す。



夏取盛経孫絡、取分間、絶皮膚、	夏は、夏の気が所在する盛経や孫絡を刺す。また分肉の間を刺す。皮膚を切ってもよい。
秋取経腧、邪在府、取之合、	秋は、秋の気が所在する経穴（経金穴・経火穴）・輸穴（輸土穴・輸木穴）を刺す。邪が六府に在れば、合穴を刺す。
冬取井榮、必深以留之。	冬は、冬の気が所在する井穴・榮穴を治療する。冬は気が沈んでいるので深く刺し、冬は気のめぐりが悪いので置鍼する。

## (2) 経脈を疎通する治療

神仙家	不老長寿（仙人）をめざす思想。その修行を仙術という。仙術には、辟穀（穀物絶ち）、服食（サプリメント）、房中（性交術）、導引などがある。 (導引に、運動、ストレッチ、あんまが含まれる。導引から、初期経脈説が生まれた。)
-----	---

\* 仙術（養生術）の一種の導引による「栄養を全身に供給するルート」が、経脈説の基本。

\* つぎに陰陽家が介入するようになり、「栄養の供給」と「老廃物の回収」という往復のルートが確立した。

\* 最後に、鍼灸治療の臨床経験が組み込まれて、複雑な経脈説が完成した。

【代表的論篇】『靈枢』経脈篇・禁服篇・終始篇

【治療道具】毫鍼・灸法・熨法（温罨法）・マッサージ。

全体に温和な治療法である。なので、よほどのことが無い限り、治療過誤はない（治療後にダルクになったりはするが）。

【現在では】経絡治療・西洋医学的治療（筋肉・神経を主とする）

【適応】整形外科的疾患。内臓の不調。体調維持（養生的）。

【基本の考え方】

- ① 単経：経脈の循行が円滑であれば健康、阻滞していれば不健康。治療とは、阻滞を解消して円滑に戻すこと。
- ② 双経：経脈の陰陽が平均化していれば健康。失調していれば不健康。治療とは、陰陽バランスを調整すること。

【必要な能力】

自分自身が健康であること。

- ① 反応を見つける能力（おもに触診力）：反応（圧痛・硬結・細絡・ひえ・ほてり・陥下・撮診痛・しびれ感・まひ感など）を見つけられるか。  
反応を処理する治療力：反応に合わせて処理できるか。
- ② 脈診力：陰陽の失調を見つける能力、調整する能力。

## 【根本の考え方】

- ① 経脈は栄養を運ぶ脈管である。
- 栄養の摂取（指導）
  - 血行をよくする運動（指導）
  - 消化器系を調える（治療）
  - 経脈上の阻滞を治す（治療）
- ② 経脈は老廃物を回収する脈管である。
- 血行を良くする運動（指導）
  - 経脈上の阻滞をとる（治療）

## 【経脈篇の治療】

## 『靈枢』経脈篇

1 盛則瀉之、虚則補之、	双経治療
2 熱則疾之、寒則留之、陷下則灸之、	経脈に拘らない治療
3 不盛不虚、以経取之、	単経治療

- ③ 単経治療：おもに陽経の外行（体表循行）に凸凹がない滑利を理想とする。触診で決める。
- ⇒患部治療＋遠隔治療
  - ⇒経絡治療の標治法。
  - ⇒西洋医学的治療（筋肉・神経を主とする）。
- ① 双経治療：陰経の外行（体表循行）に凸凹があまり出現しないので、陰経は遠隔治療がしにくい。そこで考えられたのが、陰経・陽経のバランスを整える治療。脈診で判断する。
- ⇒脾経が弱く、胃経が強ければ、脾経を補い、胃経を瀉す。
  - ⇒経絡治療の本治法。
- ② 経脈に拘らない治療
- ⇒熱感があるところは散鍼して、寒（ひえ）の所は置鍼し、落ちくぼんでいるところには施灸する。（患部であったり・患部でなかったり）

【微小循環（毛細血管における循環）】

NHK スペシャル 取材班『百寿者の健康の秘密がわかった 人生100年の習慣』  
(講談社)

百寿者（センテナリアン）

現役で仕事をしている

→「微小循環」が活性化している

→老廃物の回収されている

→「慢性炎症」が少ない

→寿命が長い

\* イタリア・サルデーニャ島

ブドウ園を営んだり、羊飼いをしたりして、平均8キロは歩く。また段差の多い島の生活で、1日に何度も急な階段を往復している。この豊富な運動量が、微小循環を豊かにしている。調査チームによると、百寿者たちの内臓機能は低下しているものの、ある程度負荷をかけた運動習慣により、ことが長寿に繋がっていることも分かった。

### (3) 九鍼治療

代表的な古典の『孫子』は、

- ① 原因結果の必然性を追求した。
- ② 軍事力の背後に経済力と国家秩序の確立をみた。
- ③ 流動的世界観をもち、あらゆるものは相対的力しかもたない。  
を主張した。

\* 原因は病邪、結果が病氣。

\* 流動的世界観とは、病氣は変化するから、臨機応変に対応すべきこと。

\* 速断速行、臨機応変、病変予測などは九鍼派ならではのものである。

【代表的論篇】『靈樞』九針十二原篇・官鍼篇・刺節真邪篇

【治療道具】九鍼

【基本の考え方】病邪を取り除けば、病氣は治る。

【適応】急性病・熱病・皮膚感染症・痺証など

【病邪の所在】病邪を見つける洞察力が欠かせない。

そのためには、一定の「神」が必要である。

【病邪】広さ・深さ・性状があるから九鍼を工夫しながら治療する。

刺節真邪篇の五邪（癰邪・大邪・小邪・熱邪・寒邪）

九鍼十二原篇の四邪（虚則實之、満則泄之、宛陳則除之、邪勝則虚之）

\* 「虚」（衰弱）も病邪に属す。無くなれば健康になるのだから。

【刺法】主に九鍼を運用する。また毫鍼の迎隨の補瀉も運用する。

【必要な能力】

神の力：研ぎ澄まされた精神・集中した意識。

晴れた心：神を裏付けする晴れた心。

病邪を洞察する力：

九鍼力：知識・運用

【治療過誤】

九鍼は強い刺激があるので、的をはずす・タイミングがはずれる・余計なことをする・しそびれるなどがあれば、治療過誤となる。九鍼とは要するに兵器なのである。

九鍼を使用すれば、痛かったり、組織を損傷するので、「臆病になる」人は、心を曇らせることになるので、一層、下手になるから、一層、治療効果があがらない。治療

効果が上がらないだけならよいが、治療過誤を招くことがあるので、ハードルが高い治療法であるといえる。

【今風では】

夢分流打鍼術・九鍼研究会・刺絡を併用する流派。

## (4) 【水穴五十七】水分代謝を促進するツボ群 (57 穴)

『素問』骨空論篇

水愈五十七穴者、尻上五行、行五、伏菟上兩行、行五、左右各一行、行五、踝上各一行、行六穴、

- 1 尻上五行、行五、(5 × 5 = 25)
- 2 伏菟上兩行、行五、(2 × 5 = 10)
- 3 左右各一行、行五、(2 × 5 = 10)
- 4 踝上各一行、行六穴、(1 × 6 = 6)

『靈樞』四時氣

「温瘧汗不出、為五十九瘡、風(水)・膚脹、為五十七瘡、取皮膚之血者、盡取之、」

## (5) 【熱穴五十九】熱を取り除くツボ群 (59 穴)

『素問』水熱穴論

頭上五行、行五者、 以越諸陽之熱逆也、	頭部の督脈・膀胱經 1 行・2 行の合計 5 本、1 本に 5 穴は、もろもろの熱逆を洩らす (越)。
大杼膺俞缺盆背俞、 此八者、以寫胸中之熱也、	大杼・膺俞・缺盆・背俞は、胸中の熱を取り除く。
氣街三里巨虛上下廉、 此八者、以寫胃中之熱也、	氣街・三里・巨虛の上下廉は、胃中の熱を取り除く
雲門髃骨委中髓空、 此八者、以寫四支之熱也、	雲門・髃骨・委中・髓空は、四肢の熱を取り除く
五藏俞傍五、 此十者、以寫五藏之熱也、	五藏輸の外側は、五藏の熱を取り除く。

『素問』熱病論

熱病、身重骨痛、耳聾而好瞑、 取之骨、以第四鍼、五十九刺、	熱病で、身体が重く、骨が痛み、難聴になったり、目をつむりたがるのは、骨を対象に、鋒鍼（三稜鍼）を使って、五十九刺する。
----------------------------------	---

## （6）処方の治療

### （1）経脈処方

#### 『靈枢』雑病篇

噤乾、口中熱如膠、 取足少陰、	咽が乾き、口の中が熱く、ねばりつくのは、足少陰経を刺す。
膝中痛、 取犢鼻、以員利鍼、發而間之、 鍼大如釐、刺膝無疑、	膝中の痛みは、犢鼻を刺す。員利鍼を用いる。鍼を刺したら日を置く。鍼の太さは釐のようである。刺すときは迷ってはならない。
喉痺、不能言、取足陽明、 能言、取手陽明、	喉痺で、しゃべることができなければ足陽明を刺し、しゃべることができれば手陽明を刺す。
齒痛、不惡清飲、取足陽明、 惡清飲、取手陽明、	齒痛で、冷たい飲料がしみなければ足陽明を刺し、冷たい飲料がしみるようであれば手の陽明を刺す。

#### 『靈枢』寒熱病篇

皮寒熱者、不可附席、毛髮焦、 鼻槁腊、不得汗、 取三陽之絡、以補手太陰、	皮寒熱は、ちくちく痛くて <sup>むしろ</sup> 席（席）に座れない、毛髪にツヤがなく、鼻が乾燥して、汗が出ない。 三陽の絡を刺し、さらに手太陰を補う。
肌寒熱者、肌痛、毛髮焦、而唇 槁腊、不得汗、 取三陽于下、以去其血者、補足 太陰、以出其汗、	肌寒熱は、肌が傷み、毛髪にツヤがなく、唇が乾燥して、汗が出ない。 三陽を下に刺し、血を出し、足太陰を補い、発汗させる。
骨寒熱者、病無所安、汗注不休、 齒未槁、 取其少陰于陰股之絡、 齒已槁、死不治、骨厥亦然、	骨寒熱は、病みは落ち着かず、汗はダラダラ出て、齒は枯れていない。足の少陰にある大腿内側の絡を刺す。 齒が枯れているのは、死証であるから治療してはな



	らない。骨厥症も同じである。
骨痺、擧節不用而痛、汗注煩心、 取三陰之經補之、	骨痺は、全ての関節が使えず痛み、汗が出て、悪心する。 三陰の経を刺し、補う。
身有所傷、血出多、及中風寒、 若有所墮墜、四支懈惰不收、名曰體惰、 取其小腹臍下三結交、三結交者、陽明太陰也、臍下三寸、關元也、	受傷して出血が多かった、風寒に当たった、落ちて打撲した。こうして手足がだるくて動かせないのを體惰病という。 臍下・下腹の三結交を刺す。三結交とは足陽明・足太陰とかかわる。関元穴である。

## 『靈樞』癲狂篇

厥逆爲病也、足暴清、胸若將裂、 腸若將以刀切之、煩而不能食、 脉大小皆瀦、 煖取足少陰、清取足陽明、清則補之、温則瀉之、	厥逆という病気は、足が強く冷え、胸は裂けるようで、腸は刀で切られるようで、悪心して食べられない、脈は大小問わず瀦脈である。 熱は足の少陰を刺し、冷えは足の陽明を刺す。熱は瀉し、冷えは補す。
厥逆、腹脹滿、腸鳴、胸滿不得息、 取之下胸二脇、欬而動手者、與背腧、以手按之立快者、是也、	厥逆で、腹が張って、腸が鳴って、胸が煩満して、呼吸がしにくいのは、 下胸・二脇（咳すると手に動く）、背腧（喜按）を刺す。
内閉不得洩、 刺足少陰太陽、與臍上、以長鍼、	腹内の気が閉じて小便が出にくいのは、 足の少陰と足の太陽を刺す。仙骨孔から長鍼で刺す。
氣逆、 則取其太陰陽明厥陰、 甚取少陰陽明動者之經也、	氣逆するのは、 足太陰・足陽明・足厥陰を刺し、 重症は、足少陰・足陽明の拍動部を経の深さで刺す。
少氣、身漻漻也、言吸吸也、骨痠體重、懈惰不能動、 補足少陰、	少気で、身体はだるく、話すのに呼吸がせわしく、骨痛み、身体重く、重だるくて動かせないのは、 足少陰を補う。
短氣、息短不屬、動作氣索、	短気で、息が短く深くできず、動作に気がつき果て

補足少陰、去血絡也、	るのは、 足の少陰を補い、血絡を取り除く。
------------	--------------------------

## (2) 経穴処方

## 『素問』刺腰痛篇

足太陽脉、令人腰痛、引項脊尻背、如重状、刺其郄中、太陽正經出血、春無見血、	膀胱経は、腰痛を起こす。(痛みは)腰から項・脊・尻・背に伸び、重々しい。 委中(郄中)を刺絡する。
少陽、令人腰痛、如以鍼刺其皮中、循循然不可以俛仰、不可以顧、 刺少陽成骨之端出血、成骨、在膝外廉之骨獨起者、夏無見血、	胆経は、腰痛を起こす。皮を鍼で刺したようで、寝返りも、振り返りもできない。 腓骨頭を刺絡する。 夏は刺絡してはいけない
陽明、令人腰痛、不可以顧、顧如有見者、善悲、 刺陽明於脗前三痛、 上下和之出血、 秋無見血、	陽明経は、腰痛を起こす。振り返りができない、振り返れば何かが見える、よく悲しむ。 足陽明経の脗の三カ所を刺絡する。 上中下を調整しながら刺絡する。 秋には刺絡してはいけない。

## 『靈樞』四時氣篇

腹中常鳴、氣上衝胸、喘、不能久立、邪在大腸、 刺育之原、巨虚上廉、三里、	お腹が鳴り、気が胸に衝き上げ、息切れがして、立位を続けられないのは、邪は大腸にある。 関元穴・上巨虚穴・足三里穴を刺す。
善嘔、嘔有苦、長大息、心中憺憺、恐人將捕之、邪在膽、逆在胃、 膽液泄則口苦、 胃氣逆則嘔苦、故曰嘔膽、 取三里、以下胃氣逆、 則刺少陽血絡、以閉膽逆、 却調其虛實、以去其邪、	よく嘔吐し、苦い水が出て、ため息が長く、心中がうれえて、捕らえらると恐れるのは、邪は胆に在り、逆は胃にある。 胆液があふれ苦い水を嘔吐するので「嘔胆」という。 足三里穴を指して、胃氣逆をおろす。 少陽の血絡を刺絡して、胆逆をとめる。 虚実を調べて、邪気を排除する。

## (3) ミックス治療

## 『靈枢』五邪篇

<p>邪在肺、則病皮膚痛、寒熱、上氣喘、汗出、欬動肩背、 取之膺中外腧、背三節五藏之傍、以手疾按之快然、乃刺之、 取之缺盆中、以越之、</p>	<p>邪が肺に在れば、皮膚が痛み、悪寒発熱し、上気して喘ぎ、汗出し、欬して肩背を動す。 中府・肺輸・魄戸（キュッと押さえたら喜按のところ）を刺す。 缺盆を刺し、熱を洩らす（越）</p>
<p>邪在肝、則兩脇中痛、寒中、惡血在内、行善掣節、時脚腫、  取之行間、以引脇下、 補三里、以温胃中、 取血脉、以散惡血、 取耳間青脉、以去其掣、</p>	<p>邪が肝に在れば、両脇の中が痛み、寒中（胃の冷え）、瘀血が内部にあり、歩けば足が攣り、時に下腿がむくむ。 行間穴を刺し、脇から下に（氣を）引く。 足三里穴で、胃中を温める。 細絡を刺絡して、瘀血を取り除く。 耳の周辺の静脈を刺絡して、痙攣を取り除く。</p>
<p>邪在脾胃、則病肌肉痛、 陽氣有餘、陰氣不足、則熱中善飢、 陽氣不足、陰氣有餘、則寒中腸鳴腹痛、 陰陽俱有餘、若俱不足、則有寒有熱、 皆調于三里、</p>	<p>邪が脾胃に在れば、肌肉が痛む。 陽氣有餘・陰氣不足となれば熱中となり、しばしば腹が減る。 陽氣不足・陰氣有餘となれば寒中となり、腸が鳴り、腹痛する。 陰陽ともに有餘・あるいは不足すれば、寒中だったり熱中だったりする。 すべて足三里穴で調える。</p>
<p>邪在腎、則病骨痛陰痺、陰痺者、按之而不得、腹脹腰痛、大便難、 肩背頸項痛、時眩、 取之湧泉崑崙、視有血者、盡取之、</p>	<p>邪が腎に在れば、骨痛、陰痺（陰痺とは按压しても手応えないもの）、腹がはり、腰痛し、便難となり、肩背頸項の痛み、ときに眩暈する。 湧泉穴・崑崙穴を刺す。 腎経上に細絡があれば刺絡する。</p>
<p>邪在心、則病心痛、喜悲、時眩仆、 視有餘不足、而調之其輸也、</p>	<p>邪が心にあれば、心痛、よく悲しみ、ときに眩暈し倒れる。 心の有餘・不足をよく観察し、輸穴で治療する。</p>

## (7) 特効穴的治療

## 『靈樞』厥病篇

厥心痛、與背相控、善瘕、 如從後觸其心、傴僂者、 腎心痛也、 先取京骨崑崙、 發鍼不已、取然谷、	厥心痛の類で、胸と背中が握られるようで、引き 攣れ、背中から心臓を触られているようで、背中 は丸くなるは、腎心痛である。 京骨穴・崑崙穴を刺し、刺して治まらなければ然 谷穴を刺す。
厥心痛、腹脹胸滿、心尤痛甚、 胃心痛也、 取之大都大白、	厥心痛の類で、腹が張り、胸が満ち、心窩部の痛 みが強いのは、胃心痛である。 大都穴・大白穴を刺す。
厥心痛、痛如以錐鍼刺其心、心痛 甚者、脾心痛也、 取之然谷大谿、	厥心痛の類で、痛みは錐で心臓を刺すようで、痛 みが強いのは、脾心痛である。 然谷穴・大谿穴を刺す。
厥心痛、色蒼蒼、如死狀、終日不 得大息、 肝心痛也、 取之行間大衝、	厥心痛の類で、顔色が青くて、瀕死の状態で、一 日中深い息ができないのは、 肝心痛である。 行間穴・大衝穴を刺す。
厥心痛、臥若徒居、心痛間、動作 痛益甚、色不變、 肺心痛也、 取之魚際大淵、	厥心痛の類で、何もせずに寝ていれば心痛が止 み、動作すれば痛みが強くなり、顔色に変化がな いのは、肺心痛である。 魚際穴・大淵穴を刺す。
足髀不可舉、 側而取之、在樞合中、以員利鍼、 大鍼不可刺、	下肢を動かすことができないのは、 側臥位で鍼を刺し、環跳穴に員利鍼を刺す。 大鍼は刺してはならない
病注下血、取曲泉	下痢をして、血が混じるのは、曲泉穴を刺す。

## (8) 垣根を越える

三大流派は、基本的な考え方は異なるので、個々が強く主張すれば、結果として「固くを守り・他を認めない」ということになる。このことは、専門性を深めるという点で良い点であるが、治療の幅を狭めているのが悪い点である。

また、三大流派を分けないで、曖昧なまま治療をすることは、治療者が苦しいばかりではなく、苦しい治療者に治療されるのは患者さんのデメリットである。また、早く治るはずなのに時間がかかり、時間がかかるはずなのにせっかちな治療をされることも、患者さんのデメリットである。

これを乗り越えるには、三大治療の特徴をよく知り、その上で三大治療の垣根を越えることが必要である。そこに、「分け隔てが無い」という思想を持つ道家思想が、重い意味を持つてくる。すでに『内経』にさまざまな治療法を集めているところをみると、当時の編集者は「分け隔てが無い」人で、道家的だったと思われる。道家的な論篇としては、『素問』上古天真論がある。上古天真論は、道家の論篇らしく、古い『素問』では末席に置かれていたが、価値が認められて新しい『素問』では第一篇に置かれた。

上古天真論は養生篇と分類され、長寿を目標にするために書かれたものだと考えられているが、「三大流派を掌にのせ、自由自在に運用できる鍼灸師を目指した」と思うと、いままでの読み方がガラッとかわる。

### 【日原利国編『中国思想辞典』研文出版】

<p>道家</p> <p>老子を祖とし、莊子が継承した学であるところから、老莊の学ともいわれる。道とは、天地の始、万物の宗であるこの宇宙の生成の原理を指している。その思想は、万物はすべて道から生成されたもので、<b>その本質において平等で差別のないものである。</b></p>		
陰陽家	神仙家	兵家
陰陽家の学・術は、古来の天文、暦法の学・術を根源としており、…宇宙、自然にかんする科学的な技術や理論がいちじるしく進歩したのを受け、呪術的な	不老長寿（仙人）をめざす思想。その修行を仙術という。仙術には、辟穀（穀物絶ち）、服食（サプリメント）、房中（性	兵法に深い洞察をもった戦略家。代表的人物として、孫武、呉起、孫臏がいる。

陰陽・五行の体系を巧みに組み合わせた、一種の自然科学が構築された。	交術)、導引などがある。	
-----------------------------------	--------------	--

### (9) 使い分けするー治療のこころ構え

#### 慢性病＝五蔵派

治療をあせると上手くいかない。

患者さんの養生が欠かせない（生活習慣）

#### 慢性病・体調管理＝経脈派

治療をあせると上手くいかない。

患者さんの養生が欠かせない（食養生・導引）

#### 急性病・急いで治したい＝九鍼派

のんびりしていると上手くいかない。

患者さんの養生は、あえては必要ではない。